



# 「<sup>はた</sup>幡」を描いた絵画土器

時代：弥生時代中期

調査名：唐古・鍵遺跡 第1次調査

発見年：1937年

大きさ：復元高 35.7 cm

今回、紹介する絵画土器（レプリカ）は、船を漕ぐ人物が描かれたものとして有名で、1937年の唐古池の発掘調査時に出土し、原品は京都大学総合博物館に展示されています。口縁部が直口する形態の壺で、お酒などの液体を貯蔵するのに適しています。

壺の胴部上半には、左方向に船を漕ぐ人物とその反対側には鳥が描かれています。船は、舳先と艫が反り上がっていることから、準構造船でしょう。舳先の人物は櫂を持っていますが、2人目は頭部と胴部と櫂、3人目・4人目は櫂のみで省略されています。

舳先の人物の櫂ちかくからは3本の放射状の線刻があり、従来、<sup>とあみ</sup>投網をする人物、あるいは<sup>うか</sup>鶺鴒飼いをする人物とも解釈されてきました。しかし、よく観察すると3本の放射状の線刻の左側には「T」字状の線刻があり、この3本の線刻は「T」字の先端、つまり竿から垂れ下がった「ひれ」で、<sup>はた</sup>幡であったと考えられるのです。幡は現在でもまつりに使われる道具で、神を迎える<sup>おぎしろ</sup>招代の役目があったと考えられます。この絵画は、その起源が弥生時代まで遡る可能性を示す重要な意匠といえるでしょう。

## ◎ 絵画土器とは

絵画土器は、土器の表面に人物や建物、鹿・魚などの絵画を焼成前にへうで描いたものです。弥生時代に数多く製作され、日本各地の弥生遺跡から出土しています。特に、唐古・鍵遺跡からは全国の半数ちかくの350点が出土し、注目されています。

